

「最終メッセージ編」出版の辞

出口和明

「KKロングセラーズ」で今まで私の監修による『出口王仁三郎が語る霊界の最高機密』と『出口王仁三郎・奇蹟を起こす霊的秘密』を出したが、今回、第三弾として『出口王仁三郎が語る霊界の最高機密・最終メッセージ編』（三月一日発行）を初めて書き下ろした。

序文を私は次の言葉で結んだ。

多くの予言が世紀末の一九九九年を終末の年ととらえる。世紀末とは、一九世紀のヨーロッパで頹廢的、冷笑的な傾向や思潮に揺れる時期をさした。だが西暦年号はキリストの生誕を起年として数えるもので、キリスト教徒でもない多くの人たちまでまきこんで終末のごとく錯覚させるのは、邪神界の陰謀である。

今、霊界では、五六七の世を願う正神界と人類の破滅を企む邪神界の葛藤が行なわれていよう。双方の内流は凡て人間

の外分に達する。太陽に向かえば明るいし、背をそむけば暗い。どちらの内流を受けるかは個々人の勝手とはいえ、地球の滅亡か栄光かは人類の選択にかかっている。

平成十一年は十（神）の一（はじめ）の年である。いや、そうしなければならぬ。

執筆中、母の昇天という予測せぬ出来事で次々と時間をとられ、ようやく脱稿したのが平成十一年一月二十五日、後で気がつく、旧暦の十二月八日。本が刷り上がったのは二月十六日。旧暦では正月元旦である。

初版は一万三千部と決定、私にとっては、平成十一年の意義ある幕開けであった。どうぞ少しでも多くの人たちにお勧めいただきたい。

出口禮子

和妙にぎたえの綾あやの高天の鶴山つるやまに

月日あひ天降りて道みちを明あかせる

二月十七日（旧正月二日）頭かぶの頭かぶとなってこの日届いた真新

しい金色の本十冊を神前に供えて、私は物語の音読に入った。

八重野母昇天前後から引き続くあれこれと、KKロングセラーズ出版に関する格拉校正などの日々を追われて、拝読は三十六巻で中断していたのだ。

これではいけない。「このこと（物語拝読）ばかりは断じて廃すべからず」「不撓不屈ふたふたの精神をもって断行すべし」と、聖師のご遺言が耳のはたで鳴っている。

この夜、三十七巻聖師前半生の現界物語に踏み入るべく、総説に続く四首の神歌を歌った。どこかひつかかる。もう一度繰り返し音読。

四首とも、神の教えを世に広く明かせよとの道歌であるが、冒頭に引用の和歌はその二首目。聖師は『玉鏡』に「十和田の和をとり、明は日と月で神を表すつもりで、かく命名した」と、和明の名前の由来を書いていられる。

霊界の最高機密

最高機密第三弾、最終編は、この世紀末から人類が未来へと向かう希望の書である。

腐敗した宗教や社会からいち早く離脱し、神の世界、将来に生きる勇氣と力を与えてくれる。誰も人は神の子であり、神の宮として、すばらしい人生を神様から与えられながら人生の悲哀や物質世界に遭遇し、魂を曇らせてゆく。本書は囚われぬいゝみろくの世を告げる警鐘の本でもある。著者会心の書！

新書判二〇〇頁／定価・九九〇円（本体九四三元＋税）／送料・一六〇円

LONGSELLER MOOK SELECT FOR READING PLEASURE-658

霊界の最高機密



出口和明

和明の誕生の地は綾部の鶴山（本宮山）山頂の穹天閣である。

昭和五年二月十一日、母八重野は尚江叔母と綾部に向う。ある人の結婚式に参列のためである。車中、母は突然の吐き気に苦しみ通した。綾部に着いても目的の結婚式には出席できず、教主殿で休み、そのまま綾部に逗留することになる。

十六日、母はかかりつけの吉川医師に診断を仰ぎ、妊娠を告げられた。

四月二日、大本の神体山である綾部の本宮山頂の穹天閣（聖師夫婦の綾部での居宅と宝物陳列所・建坪二四九坪）の竣成式が行なわれた。母は二代さまの強い勧めで新築なつた穹天閣に移るが、それ以来出産まで流産を極端に恐れ、夫のいる亀岡に帰らぬばかりか、穹天閣から一步も外出しなかつたという。

「元来は王仁の子となつて生れる筈であつたが、それが出来なかつたので、八重野が生ましてもらつた和明がそれである」と『玉鏡』にあるが、誕生の八月十五日と十六日には、聖師は亀岡の高天閣にありながら、綾部の産室をのぞいた歌（霊で？）を「父として」十六首歌われる。（庚午日記）

その一首。

貧しけれど吾が世を継がむ相続者

生れし今日の嬉しさ忘れじ

八月二十日、六日垂れ（生後六日目に赤子の産毛を剃る習慣）

の祝いのために、聖師は朝八時に汽車で亀岡を出発、綾部に向かわれる。山駕籠で穹天閣に登られ、肉体をもつて和明と初めて会われる。翌日も会いに来られ、その時の模様は「産屋」三十四首、七夜十首で歌われるが、庚午日記では省略されていて不明である。

冒頭の歌の通り、道を明かにするのを天命として、和明は綾の高天原の鶴山に生まれたのだ。歌の始めと終わりの文字は和と明。『大地の母』取材当時の三十年前から三十七巻は幾度も読みこんでいたはずなのに、この姓名読みこみ歌にはどうして気づかなかつたのだろう。否、力不足をおそれつつようやく願したこの本に、今下された聖師の祝いのメッセージなのかも知れない。

「吾が世を継がむ相続者」って何だろう。他でもない。吾が世とは、神の、スサノオのみ教なのだ。永遠の愛善苑主として昇天された聖師のみ教は、愛善苑宣信徒一人一人が相続者となつて継がねばならない。和明や私もその使命を負つた一人としての重責を思う時、神業につかえさせて頂くかたじけなさに身震いする思いでいる。

何事も神に任せてまか身まの幸を賜へかしとは祈りまつらじ 王仁

人生の伴侶と共に出口王仁三郎聖師の教えを信仰していけたら、この上ない喜びだと思えます。でも現実の問題として、年頃の子供達を持った方ならば、一度は経験があると思

ことが一番の幸せだったと相手の方が思ってくれたら……」と申しました。

います、結婚のことになるとこれが本当に大変なことなのです。相手の方に理解をして頂くのはもちろんのこと、先方のご両親にもお話をせねばなりません。そして一応ご理解下さればよろしいのですが、実際はなかなかそうはまいりません。

人一人を信仰に導くことは、神様のご守護を頂かなければ、私達の力では至難の業です。そんな話をした後の夕拝のご神歌がこのお歌だったのには驚きました。私達はとかく取り越し苦労、過ぎ越し苦労をしがちですが、神様にお任せした以上は、身の幸を祈らずとも神様はよき様にお導き下さるものと確信しています。

先日ずっと以前から「結婚したら神素盞鳴大神様を奉斎させて頂きたい」と願っている子供と、信仰のことなどあれこれ話しあった時「神様にすべてお任せして、あとは至誠一貫祈りつつ進ませて頂くことだね」と話しました。子供は「もしかしたら一生かかるかも知れないね。でもいつの日か自分と結婚したことによって、出口王仁三郎聖師に出逢えた

